岐阜市内で起きた中学生の自殺について

お亡くなりになった生徒のご冥福をお祈りし、ご家族及び関係者の方々には謹んでお悔やみを申し上げます。どれほど時が流れようとも、悲しみや苦しみ、自責の念が和らぐことはありません。

12月23日、岐阜市教育委員会いじめ問題対策委員会が調査報告書を答申しました。

認定されたいじめの数の多さとその内容に改めて陰湿さ、暴力性を感じざるを得ません。こうした行為は、被害生徒の心と体を大きく傷つけ、終わることのないかのような恐怖や苦しみを与えたものであり、加害生徒とその生徒の教育に第一義的責任を有する保護者の責任は免れるものではなく、人として断じて許せるものではありません。

児童・生徒が安心、安全に生活でき、学習する権利を担保されなければならない学校が、「組織として機能しなかった」という指摘を受けることは、まさに痛恨の極みです。組織はそれを動かす人で成り立っており、それぞれの一個人が優れた人間性と業務の遂行能力、公正公平な判断力等を持ち得ていることが何よりも必要であり、優れた戦略も戦術も「人」なしには語るできません。学校も責任を逃れることはできず、地域住民を始めとする県民の信頼を取り戻さなくてはなりません。

教育長は、「人の認識が良くなかった」と述べています。認識とは、ある辞書には、「物事を見分け、本質を理解し、正しく判断すること。また、そうする心のはたらき」とあります。しかしながら、認識が良くなれば、それがすぐ行動として結びつくとは限りません。また、行動に移せたとしてもそれが形式的なものであるならば全く意味がありません。私達はそれぞれの働く場や立場において、何よりもまず行動に移さなくてはなりません。その行動が、心から子供のことを思い、心配しているのだという思いに裏付けられたものであれば、きっと子供や保護者、管理職を始めとする同僚等にも響き、心が揺さぶられ、強く勇気ある行動に繋がるのではないのでしょうか。私達はいじめについてのメモを差し入れた仲間の生徒の心と行動の在り様をしかと心に刻まなくてはなりません。

今回の痛ましい出来事はいわゆる研究校（研修校、教育実習校）と呼ばれる学校で起きました。研究校に限らずどの学校でもこうした事案は起きうるものであり、研究校の多忙さが、子供と向き合う時間を奪うという見方は短絡的すぎると考えます。しかしながら、研究校に勤務する者が、将来は岐阜県の教育のリーダーとして、子供のより良い成長への貢献を通して県民に奉仕するという崇高な理念を忘れ、自身の名声やより良い結果を残すことだけに執着し、子供をないがしろにしているといったあるまじき事案も耳にします。また、県民に「岐阜県は、どの学校も、どの先生もいじめに対して同じような対応をしているのか。」という疑念や不安、怒りを生じさせているのは容易に想像できることであり、日々子供たちと誠実に向き合い、自身のプライベートに充てるべき時間をも使い、身を削りながら奮闘している他の教師への信用の失墜をさせたことに対する責任を依願退職した前教諭だけに押し付けてはならず、当該学校、市教委が一体となって、信頼を取り戻すべく行動を起こすべきではないのでしょうか。

もう一度、私達教師を始め、学校教育に携わる全ての者が立ち止まって、自身の胸に手を当て、自身の心にベクトルを向け、教育という営みの価値や意味を見つめ直し、教職に就いている自分を支えている思いに立ち返ることが必要です。

失われた命は蘇りません。その命が私達に訴えたことを胸に刻み、命の尊さを全ての子供たちに必死になって説き続けることが私達教育専門職の使命ではないのでしょうか。

岐阜県学校職員組合
執行委員長 高橋 篤